

中学部の国語指導における ICT を活用した家庭学習支援

～双方向型ICT教材の開発～

佐坂 佳晃

本校中学部では、2017年度より、授業場面でリアルタイム授業支援アプリ MetaMoJi Classroom を活用している。2020年度4月より始まった臨時休校の期間中においては、より円滑に教科学習の指導・支援を行い、家庭での学習量の確保を図るために、前述の授業支援アプリを活用し、教科担当者からの課題をオンライン上で学習することとなった。国語科では、教科の特性上、発問によって生徒の思考を促したり、発言を引き出したりする。そして、その内容を基に理解の程度を知り、知識を補充するための説明をしたり、理解を深めるための更なる発問を行ったりする。それをオンラインでの学習で行うためには、通常の授業と同様に、授業者と生徒による双方向型の授業形態である必要がある。今回は、聴覚に障害を有している生徒が効果的に双方向型のオンライン学習ができるための、国語指導における ICT 教材作りについて報告したい。

キー・ワード：リアルタイム授業支援アプリ 双方向型オンライン学習 質問のページ

1 はじめに

臨時休校期間中の家庭学習については、各教科の学習の遅れを取り戻し、かつ生徒の学習内容の定着を図るための方法が検討された。

国語科では、双方向型オンライン学習においても、授業者と生徒とのやり取りを中心としたいわゆる主体的・対話的で深い学びの授業となることを目指した。

今回の双方向型オンライン学習において活用した「MetaMoJi Classroom」は、授業者が生徒の学習状況をリアルタイムに把握できる授業支援アプリである。次のような特長がある。

- ・児童生徒一人一人の学習状況をリアルタイムにモニタリングでき、児童生徒が課題を提出しなくても、全体を把握できる。
- ・モニタリング画面から、授業者が個別にアドバイスすることができる。
- ・紙に書いているような感覚で編集でき、一斉学習・個別学習・グループ学習といった授業シーンに合わせて授業ノートを作成できる。
- ・普通教室での利用のほか、校外学習、遠隔授業な

どで活用できる。

こうした特長を活かして、4月～5月の2ヵ月間で、中学部1年については、詩：『ふしぎ』（金子みすず、3時間配当）、物語：『音を追いかけて』（まはら三桃、4時間配当）の2単元の指導を行った。

2 国語指導における ICT 教材の特徴

(1) 出題日、提出期限、返却日の設定

各課題にはそれぞれ「出題日」、「提出期限」、「返却日」が決められており、生徒は期限内に提出し、返却された内容を確認する（Fig. 1～2）。



Fig. 1 出題日、提出期限、返却日の設定

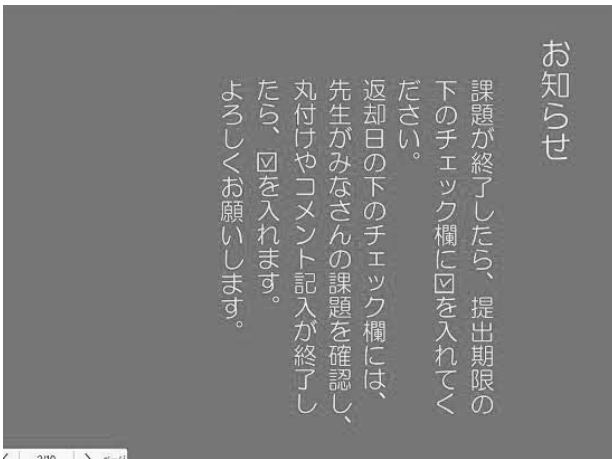


Fig. 2 出題日、提出期限、返却日の説明

チェック欄を設けることで、課題についての状況を、授業者、生徒ともに把握できるようにした。例えば、課題提出が遅れている生徒については、その状況を担任に伝え、提出を促してもらうなどの対応を取ることが可能になる。

(2) 課題の内容や進め方の説明

物語：『音を追いかけて』の語句の意味調べについては、中学生になって初めての課題だったので、できるだけ平易な言葉を使って指導した。(Fig. 3~4)。

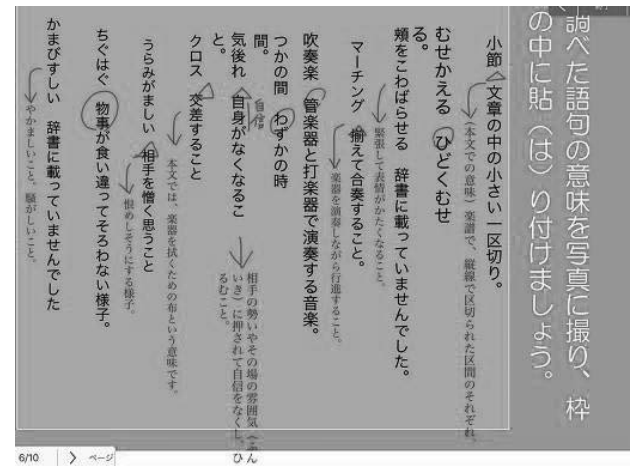


Fig. 4 語句の意味調べの事例

Fig. 3のように、ほとんどの生徒は大学ノートに記入し、スマートフォンやタブレットで撮影した画像を、各自の課題に貼り付けることができた。それを授業者が確認し、評価や訂正を記入して、課題の返却日までに生徒が自分の課題を確認できるようにした。

Fig. 4のように、スマートフォンやタブレットの操作に慣れている生徒は、課題の画面上に直接入力することができた。直接入力ができることで、生徒の学習時間が短縮され、負担の軽減になった。単元の課題が回を重ねるごとに、こうした生徒は増えていった。

(3) 文章構成の理解

物語：『音を追いかけて』の文章構成を理解する授業では、Fig. 5、Fig. 6に示す通り、第一場面から第三場面に分け、それぞれに小見出しを付け、粗筋をまとめている。

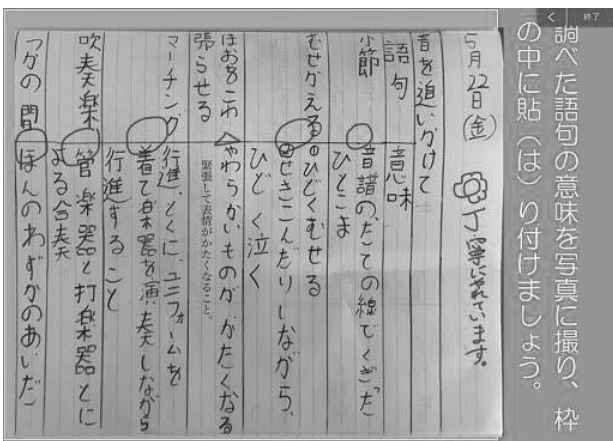


Fig. 3 語句の意味調べの事例



Fig. 5 『音を追いかけて』の文章構成(第一～第二場面)

に双方向型のオンライン学習であると言えるであろ
う。

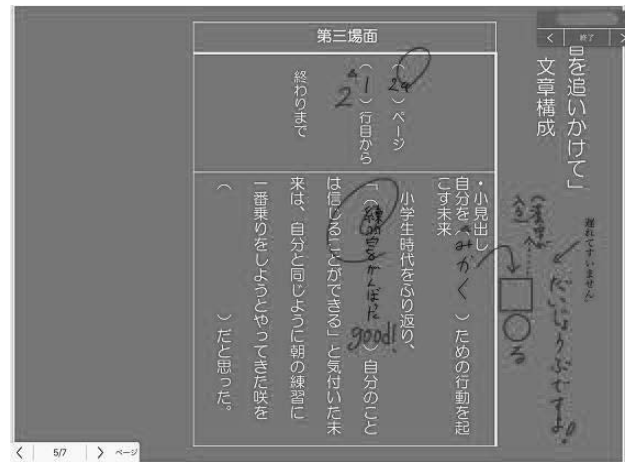


Fig. 7 文章構成(第三場面)の解答事例



Fig. 6 『音を追いかけて』の文章構成(第三場面)

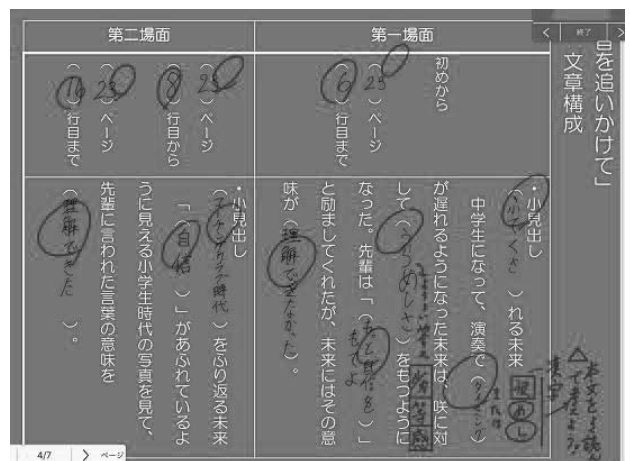


Fig. 8 文章構成(第一～第二場面)の解答事例

通常の授業では、小見出しや粗筋については、授業者と生徒、生徒同士のやり取りによって、生徒が読み取った内容から引き出されるものである。しかし、オンライン学習ではそれが難しいため、小見出し・粗筋ともに空欄を設け、生徒に考えさせることとした。

生徒から提出された課題に対する評価を記入する際、誤答に対しては、正しい読み取りができるためのアドバイスをを行った (Fig. 7)。また、より良い読み取りを求めたい場合も、さらに読みが深まるためのアドバイスをを行った (Fig. 8)。

アドバイスを基に考えた解答が誤答になってしまった場合は、それに対するアドバイスを再度おこなう (Fig. 8)。こうした授業者と生徒とのやり取りによって、読みを深めることができる。これは、まさ

(4) 読み取り

物語：『音を追いかけて』の文章構成では、第一から第三場面まで、場面ごとに要旨をまとめた。それを踏まえて、読み取りを行った。主人公の心情を表す表現について、題材における比喩的心情表現と、直接的な心情表現との違いを考えさせた。中学部に入学したばかりの1年生にとっては、難易度の高い課題なので、Fig. 9に示すように、発問の意図を捉えやすい例を提示した。

生徒の答えには、例えば、「教科書に書いてある表現は別なものに例えて表現されていると思う。」というのがあった。授業者としては、さらに生徒に深く読み取らせたいので、「だから()」とシートに

書き、自分の解答の続きを考えさせた。(Fig. 10)。生徒からは反応がなかったので、Fig. 10 に示す通り、「より登場人物の心情が伝わりやすくなる。」という題材の比喩的心情表現の特長について記入し、当該生徒が理解できる内容で説明した。

詩：『ふしぎ』の読み取りについては、Fig. 11 に示す通り、この詩に出てくる語句について画像を提示し、画像を参考にしながら、詩を音読するよう指示した。そして、作者の金子みすゞについて、彼女の性格や人柄を想像し、シートに書かせた (Fig. 12)。



Fig. 11 『ふしぎ』に出てくる語句について画像資料

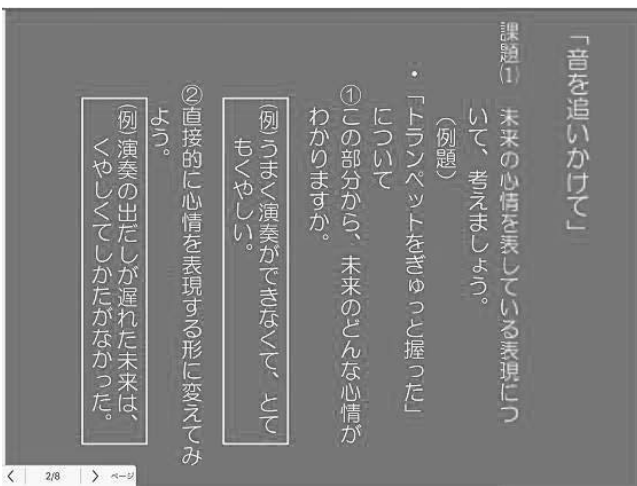


Fig. 9 発問の意図を捉えやすくするための事例

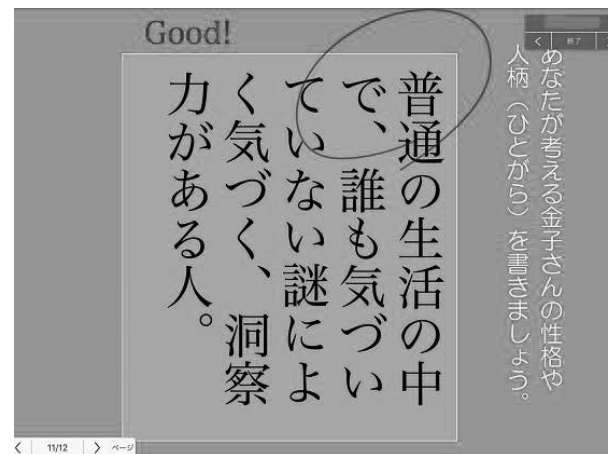


Fig. 12 作者の性格や人柄についての解答事例

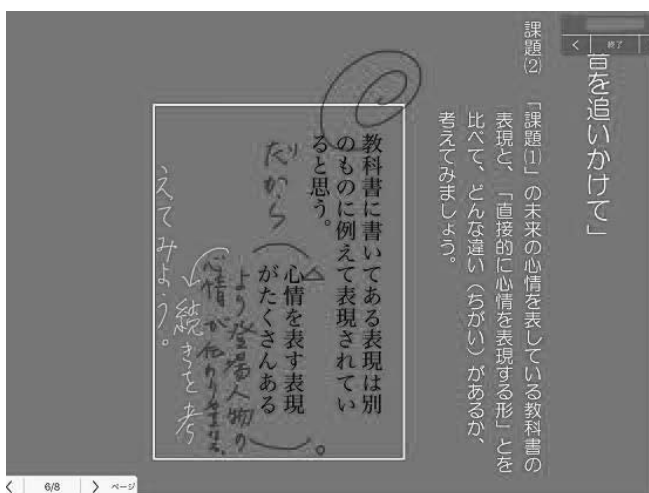


Fig. 10 『音を追いかけて』の読み取りにおける解答事例

(5) 動画の活用

詩：『ふしぎ』の読み取りでは、より実際の授業に近づけるために動画を用いた。動画の内容は、「七音・五音の詩は、歌になりやすい。」というものである。以下は動画で説明した内容である。

「こんにちは。佐坂です。よろしくお願ひします。七音・五音で書かれた詩というのは、本当に歌にな

りやすいんですよ。ではその例を一つ紹介しますね。これです。じゃん(本校校歌の楽譜を提示する)。これは、この学校の校歌です。では、この所、1番を少し歌ってみるね。いくよ。♪小高き杜の(指を折って数えながら歌う)、ありゃ、七音です。♪国府台(指を折って数えながら歌う)、あれ、五音です。学校の校歌は七音、五音で書かれているんですね。おもしろいですね。」

詩という文体が持つリズム感や、意味のつながりを大切に声に出して読むことの重要性に気付いてほしいという意図で、動画を活用した。休校終了後、視聴した生徒からは、「校歌は七音・五音でできていることが、初めてわかった。」「詩の勉強に興味があった。」「口の形がはっきりしていて、わかりやすかった。」という感想を聞くことができた。

(6) 質問のページ

課題に対する質問や感想など国語に関することを、自由に記述することができるシート「質問のページ」を作成した。

例えば、Fig. 13、Fig. 14に示す「先生はどんな物語(本など)が好きですか?」「今後の学習予定はどのようになっていますか?」のように、課題の内容とは直接関係のない質問があった。このオンライン学習が行われた時期は臨時休校中であり、1年生とは対面していなかったため、授業者は生徒とのラポートを取る必要性を感じていた。よって、どのような内容に関しても、できるだけ丁寧にやり取りをするように心がけた。

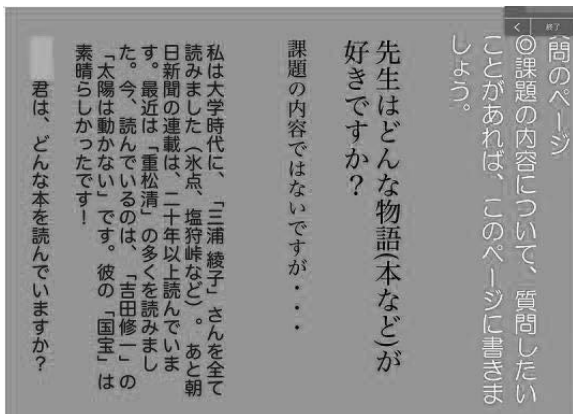


Fig. 13 質問のページの事例

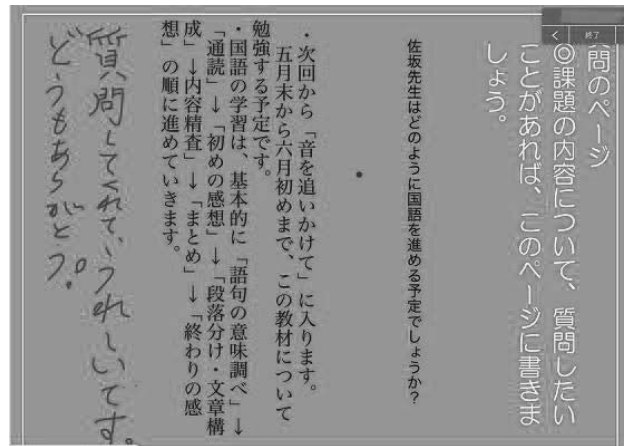


Fig. 14 質問のページの事例

Fig. 15に示す「心情を表している表現を考えるのが難しかったです。何度も直していました。遅くなってすみません。」については、これを記述した生徒の解答は、大変内容が優れていたため、授業者から「しっかりと教科書を読んで、考えられています。」という評価を返信した。

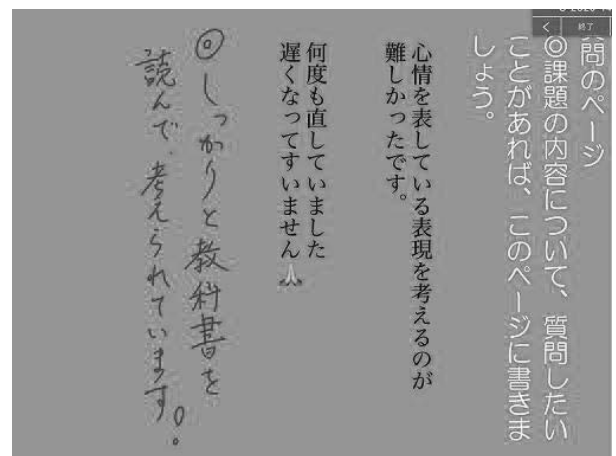


Fig. 15 質問のページの事例

3 まとめと今後の展望

6月になり、学校が再開した。対面による1年生徒との国語の授業が始まった。詩:『ふしぎ』、物語:『音を追いかけて』について、生徒はどこまで読めているのかを、復習の形で確認した。

結果は、予想以上に題材の内容を理解することができていたということが判明した。手探りで開始した国語指導における ICT 教材作りであったが、リア

ルタイム授業支援アプリ MetaMoJi Classroom を活用することで、ある程度、生徒が理解できる双方向型のオンライン学習ができたのではないかと自己評価している。

その成果として、1年生の国語学習においては、進度の遅れが生じることなく、1年間の学習を無事終えることができた。

今後は、さらに生徒が活用しやすい ICT 教材作りを目指したい。例えば、画面を見やすくするための背景の色や、解答を書き込みやすくするためのスペースの大きさ等はまだまだ改善の余地がある。また、画像の動画の活用の仕方工夫しだいで、さらに理解を深めるための教材作りが可能になると思われる。

本校中学部では、他教科でも ICT 教材作りが盛んに行われている。情報を共有しながら、より効果的な教材作りに努めていきたい。現在、全国の学校でオンライン学習が行われ始め、教材開発が進められている。そうした情報についても積極的に収集を行い、国語指導における ICT 教材作りに生かしていきたいと考えている。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。

〔参考文献〕

伝え合う言葉. 中学国語 1. 教師用指導書, 教材研究編上, 教育出版株式会社, 54-72.